



Title	東郷実と帝国日本 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	井上, 将文
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12063号
Issue Date	2016-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61536
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Masafumi_Inoue_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士(文学)

氏名：井上 将文

	主査	教授	権 錫永
審査委員	副査	教授	村田 勝幸
	副査	教授	白木沢旭児
	副査	准教授	川口 暁弘

学位論文題名

東郷実と帝国日本

本論文は、札幌農学校出身の植民学者にして植民地官僚であり、有力な代議士でもあった東郷実が、自身の農業植民論に基づいて、帝国日本の対外膨張を推進し正当化していった過程を論じる。

従来の日本の歴史研究は、国策としての植民政策を擁護・推進する立場にいた学者を考察の対象としない傾向があり、植民政策にかかわる政治過程に関する研究は立ち遅れている。また、石橋湛山に代表される「小日本主義」への関心に比べ、「大日本主義」への関心は極めて薄い。こうした傾向により、「大日本主義」を思想、政治の両面において担った人物と言える東郷実については、時折、研究の必要性が指摘されながらも、これまで体系的に研究されてこなかった。

こうした研究状況に対して申請者は、東郷実が北大植民学を植民地官僚及び代議士という立場から推進したことに着目することにより、第一、植民思想史研究を進展させること、第二、長年台湾総督府に勤務した政治主体としての植民地官僚（「在来官吏」）の植民思想がいかに国策に反映されたかを明らかにすること、第三、植民学者として代議士になった数少ない事例である東郷の植民思想が、代議士時代を通じていかに国策に反映されたかを明らかにすること、を目指す。

本論文の当該領域における研究成果は以下の通りである。

本論文は、大枠で見れば、東郷実に関する人物史として、そして植民思想史と政治史を接合させた研究として草分け的なものであり、両方において大きく貢献するところがあつたと判断される。

具体的には本論文は、第一に、植民思想史の観点から見て、(一)札幌農学校の系譜の植民思想が、台湾総督府官僚であり有力な代議士であつた東郷実を通して実現していく

様相を明らかにし、(二)東郷の「天下三分」という勢力均衡論や「無戦」の理念が、日本を盟主としたアジアにおける帝国秩序の構築によって、新たな国際秩序の創出を企図するものであったことを論じることで、植民学に反映された「帝国秩序」と「国際秩序」の媒介の論理」(酒井哲哉)の一端を浮き彫りにした。帝国大学の植民学が政策形成に果たした役割を考える道筋を示した点でも貢献が認められる。

第二に、政治史の観点から見て、(一)東郷が自身の構想を政党政治という場において実践し、海外植民政策主体としての拓務省設置や「人的資源」の育成を目的とする農業教育学校の設置のように、自身の構想を実現していったことを論証することによって、戦前・戦中の日本における政党及び議会が、政治家個々人の構想や理念を実現する場として機能していたことの一端が明らかとなったこと、(二)政友会中島派が世界新秩序を構想し、それを実行するために議会勢力を中心とした強力な政治組織を構築しようと企図して、大政翼賛会成立により挫折するまでの過程を論じることによって、政友会中島派の政策構想について研究の進展をもたらしたこと、といった貢献が認められる。

ただ、政治史の面では、政治過程の分析が不足していることにより、東郷実の果たした役割の面で不明な点があることや、有権者・支援者に向けられた政策関連の言説への着目がなかったこと、といった課題も残されている。

しかし、このような課題は、さらなる研究の発展のために必要とされるものであるが、上述の研究成果をいささかも損なうものではない。